人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 22, 1-12

■　特集「ICTと人間関係」

ラボラトリー方式の体験学習における バウンダリーと「今ここ」に関する一考察[1]： グループ・アプローチとICTとの関連から

土　屋　耕　治
（南山大学人文学部心理人間学科）

要　旨

本論考では，関わりの体験から人間関係やコミュニケーションについて学ぶラボラトリー方式の体験学習においてバウンダリー（境界）と「今ここ」の関係について考察を加え，「今ここ」のやりとりを扱うためには，バウンダリーの設定と維持によって成立する場が必要であることを論じた。さらに，時間的，空間的制約を超えたコミュニケーション（e.g., ICT）との関連を考えるにあたり，バウンダリーが概念的になること，また，バウンダリーの曖昧さに伴い「今ここ」を扱う難しさが生じることを指摘した。さいごに，今後の方向性として，閉じたグループの価値を認識すること，対面では無い関わりの場でもバウンダリーの設定と維持によって補完される部分がある可能性，ICTを用いることが対面よりも「今ここ」の場への参画を促進する方向性について論じた。

キーワード

ラボラトリー方式の体験学習，バウンダリー（境界），「今ここ（here and now）」，グループ・アプローチ，ICT

1．本論考の目的

本論考は，ラボラトリー方式の体験学習におけるバウンダリーと「今ここ（here and now）」の関係について考察を加え，「今ここ」を超えたやりとりの成立を容易にするICTにおけるグループの人間関係に留意が必要な点について論じる。ICT（Information and Communication Technology）とは，情報通信技術を指し，学習活動をはじめ様々な活動において活用されることが見込まれ

[1]　本研究は，JSPS科研費22K3040の支援を受けた。

ている（文部科学省, 2017）。アクティブラーニングの学習側面とICT活用研究をまとめたレビューでは，デバイス等の開発研究，ソフトウェア等の開発研究，デバイスやソフトウェアを活用した研究の３つに分類され，ICTが学習の何を支援しているのかという点で検討を加えている（大山・松田, 2018）。 本論考では，学習のなかでも，人間関係領域の体験学習であるラボラトリー方式の体験学習に着目して検討を加える。

２．ラボラトリー方式の体験学習におけるバウンダリーと「今ここ」概念

本論考で焦点をあてるラボラトリー方式の体験学習とは，「特別に設計された人と人とが関わる場において，“今ここ”での参加者の体験を素材（データ）として, 人間や人間関係を参加者とファシリテーターがともに学ぶ（探究する）方法」（津村，2010，p. 173）と説明されている。

この学び方の特徴について，(1)バウンダリー，(2)「今ここ」という２つの観点から考察を加えたい。

２．１　バウンダリー

第一のバウンダリーとは，境界を意味する言葉であり，関わりの場を周りと切り分けて準備することを，「バウンダリーを引く」と表現したりする。バウンダリー（境界）という考え方は，システム論と関連が深く，家族療法で対象を捉える際（e.g., 中野・吉川, 2017）や，組織において起こっていることを捉える際にも用いられる（e.g., Obholzer & Roberts, 2006）。

特別に設計された人と人とが関わる場（ = ラボラトリー）を設定し，維持するという意味において，ラボラトリーはバウンダリーが設定されて成立するものであるということができるだろう。ラボラトリー方式の体験学習の一つの学び方に，非構成のグループ体験であるTグループがある。Tグループは，「文化的孤島」と呼ばれるように，日常から切り離された場で集中的なグループ体験として実施されることを基本とする（山口, 2005）。グループ・アプローチのなかには様々なものがあり，Tグループは，ベーシックエンカウンター・グループ，集団精神療法との関連が見いだされている（坂中, 2015）。集団精神療法は「集団の力を使って，これに参加しているメンバーの精神病理を癒し，精神的健康を増進させることを目的として行われる精神療法の一種である」（吉松, 1999, p. 43）と定義される。

集団精神療法において，バウンダリーについて言及されているものがあるので，ここで紹介したい。

バウンダリー（Boundary）について

集団精神療法を実施するにあたって，その存在を明確にする条件

をバウンダリーという。すなわち，一定の時間に，一定の場所で，いつも同じ治療者がいて，集団精神療法が，あるいはグループが開かれるという保証である。これなしには，いかなるグループも存在しえないし，バウンダリーの設定によって初めて，グループあるいは集団精神療法の基礎が据えられるのである。

このバウンダリーを守ることが治療者に課せられた最大の課題である。患者が来ようが来まいが，使用者はこのバウンダリーを守る。このバウンダリーを守れる治療者のみが集団精神療法を実施できるのである。

バウンダリーは患者に，明瞭な枠組みを与え，同時に安心感を与える。そこから治療者-患者の関係が健やかに育つ可能性が芽生える。バウンダリーを守ることが，コンダクター（著者注：治療者）の役割のアルファであり，オメガでもある。

このバウンダリーが患者の心的内界に安定した枠組みを与える。（鈴木, 1999, p. 144）

また，バウンダリーを維持することは，グループの存続に関わることも言及されている。

バウンダリーの維持というのは，グループを開く場所，時間を決め，メンバーを選ぶこと。またグループを時間通り始め，終わることも含めて，グループの身体的，心理的な枠組みを守り，それを点検，維持していくことである。コンダクターが一人でしなければならないことも含まれるし，メンバーとの共同作業になっていく部分もある。いずれにしてもバウンダリーの維持は，グループの存続に関わる重要な要素である。（鈴木, 1999, p. 82）

木村（2005）も，「枠」という呼び方でラボラトリーを表現しているが，これは，バウンダリーで守られたものであるということと同じ意味であるだろう。

体験学習におけるラボラトリーは，それ自体，“枠”そのものだといえます。日常場面での規制の枠をはずし，特殊な枠の中で自由に動いてみる。それはファシリテーター（あるいはトレーナー）によって大きく守られている枠であり，普段では出すことのできない自分を表現することを試みることができる―それは“無意識が動き出す場”であるといえます。（木村, 2005, pp. 18-19）

Shein（2015）は，ラボラトリー（ラボ）のことを，コンテナ（容器）と呼

びながら，その場が日常における文化的ルールの適用外とされることの必要性について言及している。

> したがって，この種のオープンエンドの学習には，ラボの設計によって安全なコンテナが作られて，発言の許容範囲の文化的ルールが一時的に停止される状況［何を言っていいか，についての文化的ルールが適用されない状況］が必要となる。（Shein, 2015, p. xii）

２．２ 「今ここ（here and now）」

第二の「今ここ（here and now）」とは，「あのとき，あの場所で（there and then）」と対比される言葉である。関わりの場への参画をもとに学びを深める体験学習において，「今ここ」の場で起こった事柄を学習の素材としていくことを指す。

「今ここで」について，分かりやすく表現しているものが，コンテントとプロセスの関係を表した氷山図であるだろう。関わりの場で何について話していたか，話題，課題といったものをコンテントと呼び，その背景として，存在しているものをプロセスと呼ぶ（e.g., 津村, 2019）。コンテントとプロセスの対比で，個人の経験全体を海に浮かんだ氷山にたとえると，観察可能な（水面上に出ている部分）言動がコンテントであり，その背景で個人が経験していること（思考，感情，望みなど）をプロセスということができるだろう。また，グループの関わりで起こっていることを氷山でたとえるとするならば，話題，課題といったコンテントと，その背景で起こっている様々なグループ・プロセスの対比として捉えることができるだろう。

吉松（1999）はYalom（1995）の研究を引き合いに出しながら，「今，ここで（here and now）」という概念が集団精神療法でも重要なものとして紹介している。

> 彼（著者注: Yalom）は集団精神療法において変化への強い治療的推進力となるのは，凝集性と「今，ここで（here and now）」起こっている集団相互作用の中にあるとする。そして，対人的学習はさまざまなレベルで起こり，その中でも感情修正体験（Corrective Emotional Experience）が重要だと強調した。また集団精神療法の発展には以下のごとき３つの集団の発展段階があるとした。すなわち，1st stageとして，依存性，2nd stageとして，葛藤，支配，反抗，3rd stageとして，受容，信頼感，親近感，凝集性，というこれら３段階である。そして，Yalomは以下の11項目を集団精神療法の治療因子として挙げている。１．希望の注入，２．普遍性，３．情報の分与，４．愛他主義，５．原初的家族関係の修復的反復，６．社会化能力の発展，７．模倣行動，８．人間関係の学習，９．集団の

凝集性，10．カタルシス，11．実存的要素である。（吉松, 1999, p. 15）

中久喜（1999）は，次に挙げるように，「今，ここで」の人間関係がグループのなかで扱われること，また，グループが人間関係の実験場となることに言及しており，これは，ラボラトリー方式の体験学習のラボラトリーの捉え方と類似しているということができるだろう。

> 集団精神療法を行うと，集団の中にいろいろな人間関係がおこってくる。メンバー同士の人間関係，メンバーとリーダーとの間の人間関係である。力動的集団精神療法では，グループの中でおこってくる“Here and Now”（「今，ここで」）の人間関係をとりあげ，それらを吟味，理解する。そしてそれに伴う感情を表現し，それを人格の中に統合してゆく。いろいろな状況においてグループのフィードバックを受けることによって，患者は自分の病的な人間関係のパターンを認識するようになり（「洞察」），グループはいわば人間関係の実験場として，新しい人間関係を試してみることができる。このようなプロセスをくりかえすことによって，患者はより健康な人間関係を作ることができるようになる。精神障害者の精神世界の葛藤は，人間関係のゆがみとしてグループの中に展開されるので，治療者はそれを客観的に観察しやすいし，また治療もしやすい。（中久喜, 1999, pp. 97-98）

２．３　バウンダリーと「今ここ」概念の関係

ラボラトリーの特徴としてある，２つの鍵概念（バウンダリーと「今ここ」）は，どのような関係にあるのであろうか。

第一は, バウンダリーがあることで,「今ここ」で起こっていることを扱える，そもそも何が「今ここ」かどうかの線引きがなされるという関係性である。「今ここ」という概念の定義には，「今ここ」ではないものが想定される，つまり，ラボラトリーというバウンダリーが引かれることで，「今ここ」とは何かということが成り立ち，扱うことが可能となる。

ラボラトリーというバウンダリーの中で起こったことは,「今ここ」で起こったこととして，グループの全員が同じように言及可能であるということも含まれる。「今ここ」という言葉で指されるものは，何もその瞬間のことだけを指すわけではない。グループ体験における「今ここ」とは，グループのスタートから終了までの間で起こったことを指すだろう。グループのなかで，「先程，このグループで起こっていたことは，グループのはじまりからたびたび起こることだと感じている」という発言があったとして，それは，「今ここ」の人間

関係に言及していることと考えられるが，瞬間的なことというのではなく，バウンダリーを持つグループが「今ここ」として定義されていることを意味するだろう。バウンダリー内で起こっていることに関しては，自分も相手も，それらのことに関して即座にアクセスすることが可能であることでもあるだろう。

第二は，ラボラトリーというバウンダリー内で，「今ここ」という参照点が存在することにより，参加者が個人の内的な経験，関係のなかで起こってきたことについて探究していくことができるということである。氷山図で表されるもの，具体的には，氷山として外界とバウンダリーを隔てて存在しているものが，個人の経験全体を指しているのだとすれば，ある地点での事象に伴い，その背後で個人のなかで起こっていたことについて焦点化していくことができる。グループに起こってきたこと（たとえば，Aの言動）について，別のメンバーのBが「今，Aの言動を聞いたとき，自分の中ではこのようなことが起こっていた」という言葉で言及した場合があったとしよう。これは，「今ここ」でのことに触れていく一場面であるが，「今ここ」のことについて探究が起こるには，参照点となる事柄が必要になる。共同で体験したこと（たとえば，グループにおけるAの言動）が存在することで，そのとき（Aの発言を聞いていたとき）にBの中で起こっていたことをともに扱っていくことができる。個人の経験した全体が氷山のようなものであるならば，海面下の部分だけではありえず，浮かび，表面化しているところがあって（グループの「今ここ」という参照点があって）はじめて，その下の部分，内的な過程についても探究できると考えられる。

３．ICTにおけるグループのバウンダリーと「今ここ」

本論考では，ICTにおけるグループの人間関係を考えるにあたり，ここまで論じてきたバウンダリーと「今ここ」という観点から論じたい。具体的には，ICTは，時間的，空間的制約を超えたコミュニケーションをその特徴とすると捉え，(1)同時的オンライン会議，(2)非同期コミュニケーション，(3)文字情報だけのやりとり，を想定しながら論じる。

３．１　バウンダリーが概念的になることについて

第一は，グループのバウンダリーが概念的になることにある。ICTを用いたコミュニケーションは，時間的，空間的制約を超えたやりとりを容易にする，つまり，「今ここ」を超えたやりとりを可能にするという特徴があると言えよう。

この時間的，空間的制約を超えるというのは，グループ・アプローチにおけるバウンダリーと正反対の特徴を持つと言える。先に述べてきたように，グループ・アプローチにおけるバウンダリー，たとえば，Tグループでは，時間と場所と人を固定することで成り立つし，先に挙げたように集団精神療法でも，バウンダリーの維持が実施者の大切な役割になる。

同一空間にいるのであれば，グループのバウンダリーが可視化されるのに対して，それ以外のやり方では，概念的にそう見なすということでしかバウンダリーの確保が達成されえないことになる。同時的オンライン会議であれば，時間的同一性は確保できるかもしれない。ただし，参加者一人ひとりの背後には，他者がいないこと（バウンダリーがそこで閉じていること）が重要になるが，それも観念的にしか行われないことになる。

バウンダリーが概念的にしか行われないことは，バウンダリーの維持という点でメンバーに負荷を強いることになるだろう。関わりのなかで疑心暗鬼になったとしても，その感情体験をその場で扱えるような土台自体の強度もメンバーに委ねることになる。これは，安全な関わりの場を作り，参加者を招き入れる（Shein, 2015）という趣旨からしても，できるならば避けたい事態と考えられる。

３．２　バウンダリーの曖昧さに伴う「今ここ」を扱う難しさ

第二は，バウンダリーが曖昧になることによって，「今ここ」として言及される範囲が見えにくくなることにある。それに伴い，何について言及しているのか，関係の中で起こってくること，それぞれの中に起こってくることとして，どの地点でのどういった事柄について扱われているのかが曖昧になるだろう。言い換えれば，参照点をもとにした経験への言及が難しくなる。氷山図で言えば，水面下のことが扱われようとしても，それが，どういった表面化した現象に伴うのかがわからないため，グループが「今ここ」のこととして深く探究していくことを難しくさせると考えられる。

これは，特に，非同期の場合，「今ここ」で自分，相手，グループに起こっていることを即時に扱うことを難しくすると考えられる。ICTを通しては，たとえば，非同期ディスカッション・フォーラム（Wallace, 2016）で，テキストを用いた豊富なやりとりが可能になるかもしれない。ただし，即座に，相手に起こっていることに言及できないという状況であれば，そのときに感じていたことと，後で表明されることとでは，変質してしまう可能性がある。これは，「今ここ」で起こってきたことを扱うことの難しさとして体験されるだろう。たとえば，Aの言動があり，受け手のBがそのとき体験したことがあったとする。その後，他の情報をもとに，新たに感じたことも加われば，最初の体験とは異なることとなるかもしれない。すると，当初起こっていたことと，最終的に表出されること（されないことも多いかもしれない）の違いが大きなものとなるだろう。ある種，ノイズも含まれた反応となることが予測され，起点となった事柄（Aの言動）の提供者も，本来の意図と影響にズレがあったとしても修正する余地もないまま，ミスコミュニケーションが進むことになるだろう。こうした過程と帰結は，双方にとって，ともに探究をすることを難しくさせるだろう。

4．今後のいくつかの方向性について

それでは，ICTの拡がりによる人間関係の変化を鑑み，グループの人間関係についてどういった方向性を示すことができるだろうか。

ここまで論じてきたことをまとめると，ラボラトリー方式の体験学習をはじめとしたグループ・アプローチにおいては，時間，空間といったバウンダリーがあることが，「今ここ」を扱い，ともに探究できることにつながることを示した。ICTは，むしろ，そうした時間，空間の制約を超えることができる点に特徴を持つと考えられる。

第一の方向性は，対面で時間，空間を共有すること，また，バウンダリーを設定することで探究できることの価値を再認識し，そうした場を設定することである。時間的，空間的なバウンダリーがある関わりの場が，関係を作ったり，修復したりすることにおいて価値があるということを認識しておく必要がある。たとえば，新たな展開として注目されているオープンダイアローグは，関係者が即座に一同に集うことをその特徴にしている（e.g., Seikkula & Arnkil, 2006）。関係に開かれるには，丁寧なバウンダリーの設定が必要となるといえるかもしれない。

第二の方向性は，時間，空間の制約を超えたコミュニケーションの場であっても，バウンダリーを意識したり，それを維持することを努めたりすることで補完をしていくという方向性である。集団精神療法に関する議論を紹介するなかで見えてきたのは，バウンダリーを設定し，それを維持していくということの大切さである。対面を超えたグループであっても，はじめと終わり，関わる人の範囲，同時性など，いくつかの事柄は，バウンダリーを設定すること，また，バウンダリーを強く意識して維持することがともに学び合う関係を作るという点でも重要な意味を持つことになるだろう。

ただし，補完をできるということは，同質であることを意味しないことから，ICTなどで「今ここ」を超える利便性があったとしても，時間的，空間的なバウンダリーで規定されるグループとどのように代替可能かという点において，引き続き，丁寧な議論が必要であると考えられる。

第三の方向性は，ICTを用いることが，対面よりも「今ここ」の場への参画を促進するという方向性である。ここでは，自閉症スペクトラム障害（Autistic Spectrum Disorder; ASD）傾向の例を挙げて今後の可能性の議論としたい。ASDとは，社会性，すなわち他者と円滑に相互作用する能力に深刻な問題を抱える発達障害である（髙橋・宮﨑，2011）。ASDは，他者の顔や目から感情を読み取ることや（Baron-Cohen et al., 1997），社会的場面に応じた行動制御に困難を抱える（Jahromi et al., 2013）。一方で，ASDの認知的特徴は能力の強みとなり得る可能性も指摘されており（Mottron, 2011），たとえば，文脈と無関係な局所への注意を必要とする処理に長けていることが報告されている(田中・神尾，2007)。

ASD者にとって，ICTを用いることが，グループの「今ここ」への参画を促進する可能性がある。著者らの検討でも，ASD傾向と関連があるとされる社会的感受性の低さがグループの場面での発話量を抑制することが確認されている（e.g., 土屋・原田, 2013）他，社会的感受性は集団討議の成果とも関連することが示されてきた（e.g., 原田・土屋, 2019）。グループ・アプローチでも，メンバーが安心して場に参画できるようなバウンダリーの設定をはじめ，様々な工夫が講じられてきたが，ICTはそれを別の形で促進する可能性がある。たとえば，同時型オンライン会議では，画面という枠組みがあることで場に参加しやすいといったことや，文字情報が「今ここ」で起こっていることの理解を助けるということがあるだろう。ただし，これらもここまで論じてきたバウンダリーと「今ここ」への参画ということとの関連で位置づけていく必要があるだろう。

情報技術の進展は，グループ体験も変えていくのであろうか。様々な変化を意識しつつ，新たな地平が望めるとよいだろう。

引用文献

Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Hill, J., Raste, Y., & Plumb, I. (2001). The "Reading the Mind in the Eyes" test revised version: A study with normal adults, and adults with Asperger syndrome or high-functioning autism. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 42*, 241-251. https://doi.org/10.1017/S0021963001006643

原田知佳・土屋耕治. (2019). 社会性と集団パフォーマンス: 他者の感情理解と自己制御に着目したマルチレベル分析による検討. *社会心理学研究, 35*, 1-10. https://doi.org/10.14966/jssp.1720

Jahromi, L. B., Bryce, C. I., & Swanson, J. (2013). The importance of self-regulation for the school and peer engagement of children with high-functioning autism. *Research in Autism Spectrum Disorders, 7(2)*, 235-246. https://doi.org/10.1016/j.rasd.2012.08.012

木村晴子（2005）. 成長するための "枠"―ラボラトリートレーニングのひとつの意味― 津村俊充・山口真人（編）人間関係トレーニング（第２版）: 私を育てる教育への人間学的アプローチ（pp. 17-20） ナカニシヤ出版

文部科学省（2017）. 次期学習指導要領で求められる資質・能力等とICTの活用についてhttp://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/037/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2017/04/18/1384303_02.pdf（2022年10月５日閲覧）

Mottron, L. (2011). The power of autism. *Nature, 479*, 33-35. https://doi.org/10.1038/479033a

中久喜雅文（1999）. 力動的集団精神療法 近藤喬一・鈴木純一（編）集団精神療法ハンドブック（pp. 143-160）金剛出版

Obholzer, A., & Roberts, V. Z.（2006）. *The Unconscious at Work: Individual and Organization a Stress in the Human Services*. UK: Routledge.
（オブホルツァー, A., & ロバーツ, V. Z. 武井麻子（監訳）榊惠子ほか（訳）（2014）. 組織のストレスとコンサルテーション: 対人援助サービスと職場の無意識　金剛出版）
大山牧子・松田岳士（2019）. アクティブラーニングにおけるICT活用の動向と展望. *日本教育工学会論文誌, 42(3),* 211-220. https://doi.org/10.15077/jjet.42166
坂中正義（2015）. 日本人間性心理学会第33回大会「グループの可能性と広がり」自主企画「グループ臨床体験を語り合う集い」. *人間関係研究, 14*, 1-36.
Seikkula, J., & Arnkil, T. E.（2006）. *Dialogic Meetings in Social Networks*. London: Karnac.
（セイックラ, J., & アーンキル, T. E.　高木俊介・岡田愛（訳）(2016). オープンダイアローグ　日本評論社）
Shein, E. H.（2015）. Dialogic Organization Development: Past, Present, and Future. In G. R. Bushe, & R. J. Marshak,（Eds.）*Dialogic Organization Development: The Theory and Practice of Transformational Change*（pp. vii-xiv）. Berrett-Koehler Publishers, Oakland, California.
（ブッシュ, G. R., & マ―シャック, R. J. 中村和彦(訳)(2018). 対話型組織開発: その理論的系譜と実践　英治出版）
鈴木喬一（1999）. 集団精神療法の実践　近藤喬一・鈴木純一（編）集団精神療法ハンドブック（pp. 143-160）金剛出版
髙橋英之・宮﨑美智子（2011）. 自己・他者・物理的対象に対して構えを変える脳内メカニズムと自閉症スペクトラム障害におけるその特異性. *心理学評論, 54(1)*, 6-24. https://doi.org/10.24602/sjpr.54.1_6
田中優子・神尾陽子（2007）. 自閉症における視覚認知研究の新しい動向. *心理学評論, 50(1)*, 40-45. https://doi.org/10.24602/sjpr.50.1_40
土屋耕治・原田知佳（2013）. 社会的感受性が合意形成に果たす役割(1) －まなざしからの心の読み取りと集団合意形成時の発言量との関連－　日本心理学会第77回大会発表論文集.
津村俊充（2010）. グループワークトレーニング―ラボラトリー方式の体験学習を用いた人間関係づくり授業実践の試み―　*教育心理学年報, 49*, 171–179.
津村俊充（2019）. 改訂新版プロセス・エデュケーション: 学びを支援するファシリテーションの理論と実際　金子書房
Wallace, P.（2015）. *The psychology of the Internet*. Cambridge University Press.
（ウォレス, P.　川浦康至・和田正人・堀正（訳）インターネットの心理学　NTT出版）
Yalom, I. D.（1985）. *The Theory and Practice of Group Psychotherapy(3rd ed.).*

Basic Books, New York.
山口真人（2005）. Tグループとは　津村俊充・山口真人（編）人間関係トレーニング（第２版）: 私を育てる教育への人間学的アプローチ（pp. 12-16）　ナカニシヤ出版
吉松和哉（1999）. 集団精神療法の枠組みと発展の歴史　近藤喬一・鈴木純一（編）集団精神療法ハンドブック（pp. 11-29）金剛出版
吉松和哉（1999）. 集団精神療法をはじめる前に　近藤喬一・鈴木純一（編）集団精神療法ハンドブック（pp. 33-43）金剛出版

A Study about the Concept of Boundary and "Here and Now" in Experiential Learning using the Laboratory Method: A Group Approach and ICT

Koji Tsuchiya
(Department of Psychology and Human Relations, Faculty of Humanities, Nanzan University)

This paper discussed the relationship between the boundary and the "here and now" in Experiential Learning using the Laboratory Method, where people learn about relationships and communication through the experience of human interaction, and argued that in order to focus on "here and now" interaction, it is necessary to have a place that is established by setting and maintaining boundary. Furthermore, in considering the relationship with communication beyond temporal and spatial constraints (e.g., ICT), it is pointed out that the boundary becomes conceptual and that the ambiguity of the boundary causes difficulties in dealing with the "here and now". Finally, as future directions, it was discussed the possibility of recognizing the value of closed groups, the possibility that some non-face-to-face interactions can be complemented by setting and maintaining boundary, and the use of ICT to promote participation in the "here and now" more than face-to-face interactions.

Key words: Experiential Learning using the Laboratory Method, boundary, here and now, group approach, ICT